

FOCUS

vol.182

2020年東京オリンピック

関西の大学生ら、どう捉える？

後編

2020年東京五輪に対し、関西の学生たちはおおむね歓迎している。しかし、東日本大震災の支援を続ける学生は「被災地が置き去りにされないか」と不安視する。阪神・淡路大震災から復興途上の神戸市民も、被災者が世間に遠慮して言いたいことが言えなくなることを危惧する。一方、五輪のPRに積極的な学生や選手育成に意気込む大学、そして専門家の意見はどうか。シリーズ後編をお送りする。

(記者=井沼陸、鈴木太郎、野田真生)

学生「関西から五輪を盛り上げたい」



オリンピック招致学生団体関西支部

長田 涼 さん

「2020年東京オリンピック招致学生団体 関西支部」の代表、長田涼さん(びわこ成蹊スポーツ大・4年)は「世界的なイベントだし、日本全国で盛り上がるべき」と話す。東京に比べて盛り上がり欠ける関西に根ざし、五輪開催に向けたメッセージを市民から広く集めている。

招致前の今年3月に活動を始めた長田さん。招致決定後『来たらしいな』くらいの反応だった周りの学生が、7年後の夢を語り始めるようになった」と、五輪の「夢と希望を運ぶ」効果を実感したという。

東日本大震災で五輪を歓迎しない声に対しては、「東北の被災地も含めて全国に希望を届けるイベント。自粛が東北のためになるとは思わない」と話す。将来的にはPR面などで五輪に関わりたいと意気込む。

専門家「五輪の背景、考えるべき」

—— IOC(国際オリンピック委員会)は平等な機関ではなく、五輪を「集金装置」にする利益団体。今回の東京開催決定はカネまみれの招致運動と消去法の結果に過ぎない。経済効果のほとんどは運営組織や協賛企業に吸収され、税金を支払う市民に還元されない。「復興五輪」ならば、まず収益を全て被災地に回すシステムが作られていなくてはならない。

東北復興を不安視する学生は、その不安を抱え続けてほしい。五輪を楽しむに学生は五輪が多くの人の犠牲の上に成り立っていることを忘れてはならない。確かに元気が出る祭りも必要だが、祭りは「踊らされる」ものではなく「踊る」もの。政府や運営組織に五輪という祭りで踊らされないために、学生はなぜ2020年に東京で五輪なのか、その背景を考えよう。今の世界と日本の状況、グローバルな文化の中でのオリンピックの位置付けとその変容を見ていく必要がある。



神戸大准教授
小笠原 博毅 氏
(スポーツ社会学)

・五輪を考えるための本
『ファイブリング・サーカス』『反オリンピック宣言』
『黒い輪』『オリンピック・スタディーズ』

育成機関「未来の代表選手を」

政治的・経済的な側面が強調されがちな五輪。だが、スポーツに力を入れる大学や五輪を目指す選手にとっては、やはり「スポーツの祭典」としての意味も大きい。

近畿大ではこれまで多くのプロスポーツ選手や五輪代表選手を輩出してきた。中でも水泳部は入江陵介選手や寺川綾選手ら五輪メダリストを輩出する名門として知られる。近大水泳部では、OBで2004年アテネ五輪の銀メダリスト・山本貴司氏をはじめ五輪経験者を指導陣に迎え、新たな体制で五輪に挑むという。また、同大はスポーツ推薦入試を導入しており、広報部は「これから近大を受験する中高生向けの広報活動に力を入れたい」と話している。

近畿大学に聞く

あなたの意見は？

招致決定！

UNN関西学生報道連盟

配信・発行 (C) UNN 関西学生報道連盟 (公式HP) <http://www.unn-news.com/>

■共同編集室 〒532-0011 大阪市淀川区西中島4-2-24 ダイニホンビル4F

(TEL) 06-6307-1315 (FAX) 06-6829-6353 (MAIL) info@unn-news.com

FOCUSは

神戸大学ニュースネット委員会
同志社大学 PRESS 編集部
NEWS 立命通信社
関学新月通信社
大阪大学 POST 編集部

関西大学タイムズ編集部
神戸女学院大学 K.C.Press 編集部
京都女子大学藤花通信編集部
京都大学 EXPRESS 編集部

の共同編集による週刊フリーペーパーです